

「君死にたまふことなかれ」 与謝野晶子の春秋

秦 郁彦

第一回

● 沢口靖子と「おしん」

二〇二二年の一〇月から、テレビ朝日の人気番組『科捜研の女』の第二十二回シリーズが再開された。あい変わらず主役を演じるのは京都府警の「榊マリ子」こと沢口靖子である。第一回は一九九九年だというから断続的ながら、かれこれ二十年を超える。彼女がNHKの連続テレビ小説『みお濡つくし』（一九八五年）のヒロインを演じていらい、ファンの一人になった私は、あるとき彼女が旧大阪府立堺高等女学校の後身である大阪府立泉陽せんよう高校の出身と知った。

きっかけは与謝野晶子の取材で、この高校を訪れた記者（どここのメディアだったか失念）が、門前で三、四人の女生徒に話しかけた。そして「卒業生の有名人は」と問いかけると、異口同音に「沢口靖子です」と答えたシーンがあったらしい。

肩すかしを食った思いの記者が「与謝野晶子は」と確かめたら「そ

ういえば……」という頼りない反応だったという。戦後はほとんどすべての小学校や中学校の国語と歴史の教科書に登場する「超有名」の晶子を知らなかったはずはないが、出身校との結びつきが彼女たちにはピンとこなかったのだろう。それなりの理由はなくもなかった。

朝日新聞大阪本社が新聞連載を一冊にまとめた『女たちの太平洋戦争へ1』(一九九一年)で柳博雄記者は「冷ややかだった母校」の見出しで「晶子は、母校や、堺市では戦後も長い間、受け入れられなかった」事情を泉陽高校の「九十周年記念誌」を編集した数人から聞きとっている。

それによると、開校六十周年の一九六一年にOBの間から母校の校庭に晶子の歌碑を建てたいと校長に打診したところ、「堺という封建的な土地で、しかも府立高校の校庭に建てるということとはとてもだめです」とはねつけられる。

十年後の七十周年に職員の間から同様の声が上がると『君死にたまふことなかれ』の碑文は反戦的すぎるし、軍国主義に副った時代が長かったのに」と異論が出て職員会議はもめた末、何とか一〇月二日の除幕式へこぎつけた。

全国で百二十六か所目の晶子碑とされるが、その後、堺市でも晶子碑が次々に作られ、市は二〇〇七年に「与謝野晶子歌碑めぐり」

と題する案内書まで発行している。明治四四（一九一一）年に「古さとの小さき町の碑に彫られ 百とせの後あらむとすらむ」（『春泥集』）という晶子の願いが遂に実現したのであった。

生涯を通じ約五万首を詠んだとされる晶子の作品のなかで「君死にたまふことなかれ」ほど突出した知名度を誇る詩は他にあるまい。

その浸透度は母国だけではなく、国際的な広がりにも及んだ。一九八三年にNHKの朝の連続テレビ小説で、空前の視聴率をあげた『おしん』を通じてである。それは翌年から世界六十八の国と地域で放映され、熱狂的な人気を博した。

そのなかに強烈な印象を与えるシーンがある。山形県酒田近傍の奉公先でいじめにたえかねて逃げ出し、雪中に行き倒れた少女（小林綾子）を旅順戦生き残りの逃亡兵（中村雅俊）が助け、山小屋にかくまう。そして一緒に過ごしている間に、「君死にたまふことなかれ」を読み聞かせられ、覚えこむ。春が来て町へ送って行った逃亡兵は憲兵に見つかり、ヒロインの眼前で射殺されてしまう。

筆者は英語版の『おしん』を見たことがあるが、*"You must not die"* をくり返し暗誦するヒロインの姿が忘れられない。だがドラマのせりふが所詮は一過性なのに対し、日本の義務教育段階で教科書を通じ反戦教育の一環として注入される浸透力は、比べものになるまい。

● 晶子は日露戦争の象徴？

私の手元に二〇一二年と一四年に発行された小学校六年生と中学校の社会科（歴史）教科書が各四冊ある。試みに「日露戦争」を記述したページをのぞいてみると、いずれも一ページないし二ページ半と極めて少ない分量しかないのに、八冊の全部にくだんの「君死にたまふことなかれ」（五連のうち冒頭の第一連八行）が登場する。

簡単な解説と写真を含め晶子は全体の半分から三分の一を占める異様な厚遇ぶりだ。いわば彼女は日露戦争を一人で背負う象徴的な超大物の座を占めたことになる。

そのかわり、明治天皇を始め桂首相、小村外相、大山・乃木將軍などの名前や写真は省かれてしまった。例外として日本海海戦の勝者である東郷大将を入れたのが五冊あるが、これは東郷の不在を批判した新聞の投書をめぐる論争に反応したせいらしい。

例外は他にもある。晶子と並んで非戦論を唱えたキリスト教徒の内村鑑三と無政府主義者の幸徳秋水で、そろって四冊の教科書に並ぶ。芸術性ではなく、戦後日本の思想界を風靡し、今も健在な反戦イデオロギーの所産であるのは明白と言えよう。

それにしても国定こくていでもないのに、義務教育レベルの教科書が、晶子の「反戦詩」をそろって掲載しているのは薄気味が悪くなってくる。

る。週刊誌が一斉にアイドルのスキャンダル事件を報じる事態に似ているが、このほうはせいぜい数週間の寿命なのに、戦後の「晶子ブーム」は数十年も続き衰える気配はない。

現行の教科書（二〇二一年度採択）も検分してみたが、十年前と比較して基調は変わらないながら多少の手直しが見つかる。たとえば晶子をふくむ内村や幸徳の非戦論は紹介されているのに、主戦論者の存在が無視されてきたのは不自然だった。東大七博士の主戦論が前回は一冊だったのが、現行では三冊に増えたし、乃木將軍の名が三冊に登場している。

それとは別に、一石を投じたのは「反戦」一色でマンネリ化していた晶子像の見直しを促す教科書の登場である。二〇二一年に採択された育鵬社版の「なでしこ日本史 その5」というコラムで、クードンホーフ光子、平塚らいてうと並んで「奔放に恋をよんだ情熱の歌人」として与謝野晶子を取りあげている。

鉄幹との恋の顛末を記し、一連の歌作を通じ「しとやかでつつましい」とされた、明治の女性像を大きく揺さぶるもの」と評し、さらに次のように記述した。

日露戦争の際には、出征した弟の無事を願う詩「君死にたまふことなかれ」を発表し、話題となりました。

しかし、太平洋戦争（大東亜戦争）の際には、

水軍の 大尉となりて わが四郎

み軍みぐんにゆく たけく戦へ

と、海軍大尉として出征する四男を励ます歌も残しました。

教科書だから論評は避けているがコラムの末尾では「1人を選び、どんなことをしたのか、調べてまとめてみましょう」と呼びかけている。どうまとめたかは知るよしもないが、「水軍の……」が晶子の最終的到達点と受けとめる生徒がいるかもしれない。なおこの「水軍の……」をめぐる諸事情については後述することにした。

わが国の教科書は中国や韓国のような国定ではなく、題材は出版社や執筆者の自由な選択に任せられている。文科省の検定も事実関係の正誤訂正に限られ、「晶子の比重がアンバランスだ」と苦情を述べることもない。そう思っても、うっかり口を出すとマスコミから袋叩きの大騒ぎに発展しかねないからだろう。

ここで「君死にたまふことなかれ」が誕生した由来とその後の反響をたどりたいと思うが、まずは八種の教科書が引用している第一連（節）の八行を次にかかげたい。夫の与謝野寛（鉄幹）が主宰する雑誌『明星』の明治三七（一九〇四）年九月号の原文に旧仮名を

改め、ふりがなを加えた清水書院版の中学教科書から引用する。

君死にたまふことなかれ

——旅順口包围軍の中にある弟を歎きて

あゝをとうとよ君を泣く

君死にたまふことなかれ

末に生まれし君なれば

親のなさはまさりしも

親は刃をにぎらせて

人を殺せとをしへしや

人を殺して死ねよとて

二十四までを育てしや

原文は八行ずつの五連から成るが、どの連にも「君死にたまふことなかれ」がリフレインのように入り、第五連の最終行もこのキャッチコピーでしめくくっている。他にも「旧家をほこるあるじにて、親の名を継ぐ君なれば」とか、「旅順の城はほろぶとも、ほろびずとも何事ぞ」とか、「暖簾のかげに伏して泣く、あえかに若き新妻を」のように情感を刺激する「殺し文句」がちりばめられている。しか

し「花鳥風月」の域を脱し、不敬罪になりかねぬきわどい第三連を
注目して付け加えた教科書が一冊だけあった。その清水書院版から
第三連を引用したい。

君死にたまふことなかれ

すめらみことは戦ひに

おほみずからは出でまさね

かたみに人の血を流し

獣の道に死ねよとは

死ぬるを人のほまれとは

大みこゝろの深ければ

もとよりいかで思されむ

ややこみいった文脈だが、山本藤枝は「わかり易い口語にいいか
えてみる」として「天皇さまは、ご自身ではいくさにお出かけにな
らないけれども、お互いに人の血を流し、獣の道に死ねよなどとは、
もとよりどうして考えていられよう、お考え深くていらっしやるの
だから」と読み解く。

夫の鉄幹も「陛下すらこの戦争を制し給ふことの難く、已むを得
ず陛下の赤子を戦場に立たしめ給ふとは、何と云うあさましき今の

世」と苦心をしのばせる読み方を示した。それなりの根拠はあった。開戦の詔書で明治天皇は「豈朕が志ならむや」と宣明していたからである。いずれも反語的技巧といなしているのだが、好意的に解する人ばかりではない。

この節に憤激した文芸評論家の大町桂月は「日本国民として、許すべからざる悪口也、毒舌也、不敬也、危険也」と攻撃したのに対し、晶子夫婦や同情者が応戦する事態となったが、政府や軍は介入を避けたため文芸論争の域にとどまった。このあたりの経過は再述したいが、百年近く後になって清水書院版の教科書が、忘れられていた第三節をわざわざ掘り起こした動機が気になってくる。

内村鑑三と並んで非戦論を唱えた『平民新聞』の幸徳秋水は、数年後の大逆事件に連座したかどで処刑された。晶子をその同類と見なし、天皇制批判のヒロインに祭りあげたい意図が働いたのかもしれない。